

# フランス語を知る、ことばを考える—語彙の諸相 2—

フランス語圏専攻 石野好一

『ことばの世界 第6号』に続き、語彙の面からフランス語の特質について考える。今回は、主に歴史面からみる。

ガリア地方のラテン語は、まずそれ以前に話されていたケルト語(ガリア語)<sup>1</sup>から基層として影響を受け、その後ここに侵攻して支配者となったゲルマン民族の言語から上層として影響を受けた(石野 2007, 2010)。こうしてフランス語が成立した。そのため、ケルト語とゲルマン語の語彙がフランス語に少なからず含まれていることは想像できよう。

## 1. ケルト語由来の語

現代フランス語に残るケルト語起源の語はあまり多くない。専門家によって数にかなりの差があり、全部でやっと50語ほどとも、ラテン語時代の借用も含めても100語たらずとも言われるが、それ以上を挙げる研究者もいる<sup>2</sup>。それでも、同様にケルト語の影響を受けた英語と比べると、フランス語の方がガリア語の痕跡が現代語に多く残っているという(Walter, 2001, p.31)。

フランス語に入ったケルト語の大部分は名詞で、田園や田舎の生活、森林に関するものが多く、衣服名・動植物・技術・尺度計量・階級官職名・地名(殊に河名)・人名を主とする<sup>3</sup>。

「ほとんど専ら野暮臭い、土臭くさえある語であって、農耕畜産、土壌、風景、粗末な衣服に関係している。抽象語の欠けているのが目立つ」(リカード, 1995, 伊藤他訳, p.14)といわれる一方で、「自然、植物、動物、ある種の技術(戦争関係、その他)などにおいては、ローマよりも進んでいたかもしれない」(Hamon, 1992, p. 11)という指摘もある。

例を挙げよう<sup>4</sup>。

フランス語	ガリア語
balai ほうき	< <i>*banalto</i> , <i>*balatno</i>
blé 麦	< <i>*blato</i>
mouton 羊	< <i>*multo</i>
caillou 小石	< <i>*calios</i> , <i>*cal</i> (石、岩)
boue 泥土	< <i>*baua</i> , <i>*bawa</i> (汚れ)

<sup>1</sup> ガリア地域(ほぼ今のフランス)のケルト語をとくにガリア語(ゴール語)という。本稿では、適宜ケルト語、ガリア語を使用する。

<sup>2</sup> 順に, Dauzat (1942), p.91. Grevisse et al. (2011), p.160. 堀井(2013)。

<sup>3</sup> Bárdosi & Pálffy (1983), p.158. Walter (同上). 山田(1981, p.8). 前島(1986), p.5.

<sup>4</sup> 以下、語源とその古形は Dauzat (1942), Dauzat & al.(1971), *Grand Robert* (GR), Hamon (1992), Walter (2001), 山田(1981), 堀井(2013), 『仏和大辞典』(仏大)などを参考にした。\*は推定形。ガリア語の意味は、分かる範囲で、現代語と異なる意味の場合に限り記した。

また、ケルト系の語の多くは、ラテン語の段階で借用され、フランス語の形成期においてはすでに用いられていた(堀井2013, p. 97)<sup>5</sup>。そういうものは自然・農耕に関するものが多い(髭ほか2008, p.40)。たとえば、次のようなものである。

フランス語	ラテン語	ガリア語
sapin 樅の木	< <i>sappinus</i>	< <i>*sappus</i>
chêne コナラ属(樅・柏・櫟)	< <i>*cassanus</i>	< <i>*cassanos</i>

ラテン語(ラ)の段階で借用された語は、フランス語(仏)やスペイン語(西)、イタリア語(伊)などロマン諸語全体に残存しているものも多く、その事実が共通ラテン語ですでに借用されていたことを示す根拠となっている(Grevisse et al., 2011, p.160)。たとえば、フランス語 *changer* がそれである。

仏 *changer*, 西 *cambiare*, 伊 *cambiar*, ... < ラ. *cambiare*

同様のものに仏語 *char* (荷車・馬車) がある。(→§1.1.)

さらに、ガリア語とガリアのラテン語を通じて、それ以前に話されていた言語の語だと思われるものも維持されてきた。たとえば、次のようなものが挙げられる(Grevisse et al., 同上)。

ajonc ハリエニシダ	< <i>ajou, agon</i>
motte 土塊	< <i>*mutta</i>
pot 壺・瓶	< <i>*pottus, potus</i>
roche 岩	< <i>*rocca</i>

### 1.1. ガリアの馬車 *char* とその豊富な子孫<sup>6</sup>

ローマ人は、ガリア人が武器や荷物を積んで移動に使っていた大型四輪馬車を知らなかったため、ガリア語から借用して、次のような語を作った。

*carpentum* 二輪馬車

*carrus* 四輪馬車

このラテン語がフランス語に移行すると、*carrus* が *char* となり、それをもとに多くの派生語を生んだ。

*charrette* 二輪荷車・荷馬車

*charretée* 荷車一台分(たくさん)

*charretier* 荷(馬)車引き

*charreton* 人力車 « *voiture à bras* (GR) »

*charron* 車大工 (ガリア人は優秀な車大工だった<sup>7</sup>。)

<sup>5</sup> 堀井(同書, p. 94-95)に 60 語ほどが提示されている。

<sup>6</sup> この節は、Walter, H. 2001. *Honni soit qui mal y pense*. pp. 31-33. を参考にした。

<sup>7</sup> Martin (2002), p147.

charroi 荷車運搬

charrier 荷車で運ぶ

この同じ語基（語根）から、ラテン語では*carruca*が創られ、そこからフランス語*charrue*犁（すき）ができる。これは、前輪付きの犁のことで、ローマの車輪のない原始的な犁*aratrum*（フランス語*araire*）に比べて、いわば「贅沢な」犁だった。

実は、動詞*charger*（担わせる）も、後期ラテン語*bas latin*の*\*caricare*を介して、同じ語根に遡ることができる。

また英語の動詞*carry*（運ぶ）もこれらと同根だが、北仏ノルマンディー地方の方言だったノルマン語*carrier*の形で借用された。そのため、語頭が*char-*でなく*car-*となった。フランス語形は*charrier*（運ぶ）だった。

さらにこの語根は後世になっても次のような派生語を提供する。

*carriole*「荷馬車」：ガリア語*char*は、のちに再び、16世紀にイタリア語*carrozza*から*carrosse*屋根付き四輪馬車として、また同じく16世紀に、古プロヴァンス語から*carriole*<sup>8</sup>（荷馬車）として現れる。

*caricature*「戯画」：動詞*caricare* « *charger* »由来のイタリア語*caricatura*から18世紀に借用し、仏語*caricature*ができる。これは人物の特徴を誇張した絵によって、アピールしたり笑わせたりするものである。

*carrière*「職業」：ガリア語*char*から古プロヴァンス語*carriera*（車道）が派生し、それをフランス語が借用した。後期ラテン語*via carraria*（仏訳*voie carrossable*車の通れる道）に由来する。

*car*：19世紀に英語から借用した。英語は中世ノルマン語に由来する。

*cargo*：英語*cargo boat*の省略形*abréviation*。英語自身はスペイン語から借用した。

このように、ケルト語からフランス語への直接の借用語は多くは残っていないものの、派生語という形で、さまざまな分野に語彙を残していることが分かる。

## 1.2.ケルト語由来の語(リスト)

現代フランス語に残るケルト語起源の語と言われるものの中から、主なものを以下に分野別に列挙する。（右欄にケルト語（ガリア語）の推定形。ただし、不明の場合はラテン語形（＝ラ）や知られている最古形を挙げたものもある。）

### ケルト語由来の語(リスト)

フランス語	古形(ケルト語[ガリア語], または遡れる最古形. 俗ラ＝俗ラテン語, 後ラ＝後期ラテン語)
植物名	
bouleau 樺	<i>*betullos</i>
bruyère ヒース	<i>*bruko</i>
chêne コナラ属(櫟・柏・檜)	<i>*cassanos</i>
sapin 樅の木	<i>*sappus</i>

<sup>8</sup> *carriole*の接尾辞*-ole*は、現代俗語の*bagnole*（車）にも見られる。この*bagnole*は、ガリアの四輪馬車*benne*が数世紀を経てくだけた言語となり、19世紀に*bagnole*という形になったものである。

blé 麦	<i>*blato</i>
bogue (栗の)いが	<i>*bulga</i> ※現代語ではコンピュータ用語の「バグ」の意も。
動物名 家畜・禽獣	
bouc 雄ヤギ	<i>*bucco</i> ※chèvre「雌ヤギ」はラ <i>capra</i> より
cheval 馬	ラ <i>caballus</i> ※古典ラテン語では <i>equus</i> が「馬」を表していたが、ガリア語から来た「駄馬」を意味する <i>caballus</i> に地位を奪われた。
mouton 羊	<i>*multo</i>
chat 猫	ラ <i>cattus</i>
blaireau アナグマ	古仏 <i>bler, blair</i> ※形容詞 <i>blair</i> 「白い」、 <i>bler</i> 「斑点がある」。頭に白い斑点があるところからか。
鳥関係	
alouette ヒバリ	<i>alauda</i>
bec 鳥のクチバシ	<i>beccos</i>
虫	
charançon ゾウムシ	<i>*kariantionos</i> 「小鹿」、 <i>kar-</i> 「鹿」
魚名	
saumon サケ	ラ <i>salmo, salmonis</i>
bécard / beccard 老いたサケ, メスのサケ	<i>bec</i>
lot(t)e かわめんたい	<i>*lotta</i>
limande カレイ	<i>lem-</i> 「板」
loche ドジョウ	<i>*leuka</i> 「白さ」 ※白い魚体から。
alose ニシンダマシ	後ラ <i>alauza</i>
※英語beaver	<i>beber</i> ビーバー, 海狸 ※フランス語は <i>castor</i> に代わられた。
飲食物関係	
crème クリーム	ラ <i>crama, chrisma</i>
cervoise 大麦ビール	<i>cervesia</i> ※スペイン語に入って <i>cervesa</i> 「ビール」となった。 ※フランス語 <i>bière</i> 「(普通の)ビール」は、オランダ語 <i>bier</i> から。
衣服名	
chemise シャツ	ラ <i>camisia</i>
drap シーツ, ウール	後ラ <i>drappus</i>
manteau マント	<i>mantus</i>
化粧・美容	
savon 石鹸	<i>sapo</i> (ゲルマン語 <i>*saipon</i> もある)
技術	
charpente (建物・人体の)骨組み・骨格・背丈	古仏 <i>charpent</i>

jante 外輪	<i>*cambita</i> <i>*cambo</i> 「曲がった」から
道具・器具	
balai ほうき	<i>*banalto</i> , <i>*balatno</i>
cloche 鐘	後ラ <i>clocca</i>
hâche 斧	<i>bascauda</i> (フランク語 <i>*hâppia</i> からかも)
broc 水さし	<i>broccos</i>
pot 壺・瓶	俗ラ <i>*pottus</i> , <i>potus</i> , 前ケルト語語基 <i>pot</i> -「丸み」
乗物	
char 荷車, 馬車・戦車	<i>carros</i>
banne 運搬車	<i>benne</i> ※始めは「荷馬車」の意. 二輪で柳の枝で車体ができている馬車.
benne トロッコ	
luge そり	後ラ <i>sludia</i> 「すべる」またはラ <i>lubricare</i> 「すべる」, <i>lubrica</i> 「滑りやすい」. ※前者は英語 <i>slide</i> と同語源
尺度計量・寸法	
lieue 里(約4km)	<i>leuga</i> ※一里(り)(昔の距離の単位で約4km). ガリア人の旅程(堀井)
tonne トン・樽	後ラ <i>tunna</i> , <i>tonna</i> ※ガリア語で「皮・肌」→「革袋」「樽」
tonneau 樽	(同上)
軍事関係	
lance 投げ槍	ラ <i>lancea</i>
matras 投げ槍	ラ <i>matara</i> (= <i>materies</i> )
階級官職名 ※ローマ人の知らない社会関係を表す語 (Martin, 2002, p147)	
ambassade(ur) 大使	<i>*ambactos</i> ※ <i>amb-</i> = « <i>aller</i> » 使者, 従僕, 奉公人のことだった.
vassal 臣下・諸侯	<i>vassus</i> 仕える者
社会階層	
gaillard 好漢	ガロ・ロマン語 <i>*galia</i> 「力」, ケルト語幹 <i>gal</i> -「勇敢」
galant 色男	(上と同じ語幹から)
田園生活 (→cf. 動物, 植物)	
berceau 揺りかご	ラ <i>*bertium</i>
bassin 泉水・貯水槽	俗ラ <i>baccinus</i> < <i>*baccus</i>
農耕	
charrue 犁[鋤](すき)	<i>carruca</i> 「牛が引く」犁 < 初め「荷車」 ※フランス語 <i>charrue</i> ←ゲルマン語 <i>charruh</i> ←ガリア語 <i>carruca</i> から
vouge 鉞鎌(なたかま)	ラ <i>*vidubium</i>
raie 畝(うね), 土手 < <i>roie</i>	後ラ <i>riga</i> < ガ <i>*rica</i> →ウェールズ語 <i>rhych</i> , 古ブルトン語 <i>rec</i> , アイルランド語 <i>rech</i> に残る. いずれも「畝」の意
sillon 畝 < <i>silier</i> 「土を移す」	俗ラ <i>seliare</i> < ガ語根 <i>selj-</i> レト=ロマン語 <i>saglia</i> 「刈り取られた草地の細い筋のこ

	と. その上に草を横たえる」
barre 棒	俗ラ <i>*barra</i> , 中世ラ <i>barra</i> 「策」 ※ <i>vara</i> 「枕木, 横木」< <i>varus</i> 「反対側」 cf. フ <i>barrer</i> → <i>barrière</i> 柵
土地	
borne 境界(石)	ラ <i>bodina, butina</i> , 俗ラ <i>bodina, botina</i> 「境界」
chemin 道	俗ラ <i>camminus</i>
grève 浜	<i>*grava</i> ※俗ラ <i>*grava</i> は「砂利」を意味していた
lande 荒野	<i>landa</i> ※ケルト語からゲルマン語, ロマン諸語へ移行した. 中世ラ, 古ガスコーニュ語では一般に「土, 土地」を表した. cf. ブルトン語 <i>lann</i>
quai 波止場	<i>caio</i> ※中世ラ <i>caiagium</i> は, ノルマン・ピカール語 <i>quayage</i> の写し <i>calque</i> . cf. ケルト語 <i>cai, cal</i> , 「家, 垣根」
鉱物名	
mine 鉱山	ガロ・ロマン語 <i>*mina</i> またはラ <i>minuere</i> 「減ずる, 細かくする」
caillou 小石	<i>*calios, *cal</i> 「石, 岩」
caillouteux 小石の多い, 砂利だらけの	<i>*caljávo, *caliavo</i>
roche 岩	俗ラ <i>*rocca</i>
boue 泥土	<i>*baua, *bawa</i> 「汚さ」
bourbe 泥土	<i>borvo</i> cf. <i>Borvo</i> はガリアの温泉水の神
glaise 粘土	<i>gliso marga</i> 「白い泥土」に遡る
motte 土塊	<i>*mutta</i> 盛土・堤防の意から
marne 泥灰土	俗ラ <i>*margila</i>
その他	
pièce 一個, かけら	<i>pettia</i> ※ウェールズ語 <i>peth</i> 「もの」, ブルトン語 <i>pez</i> . cf. 中世ラ <i>pecia, petia</i> .
形容詞	
dru 丈夫な, 元気な	ラ <i>druidae</i> cf. <i>druide</i> ドルイド僧
creux 空洞・くぼみ(の)	ラ <i>croesus</i>
riche 金持ちの	<i>rix</i> (= <i>roi</i> 王) ※フランク語 <i>*rikki</i> も同源.
動詞	
barrer ふさぐ	(上記 <i>barre, barrière</i> 参照)
battre 戦う	ラ <i>battuere</i> 「殴る」> <i>battere</i> 「負かす」
changer 変わる・変える	後ラ <i>cambiare</i> , ラ <i>cambire</i> 変える, 取り替える
charger 負わせる	後ラ <i>*car(r)icare</i> 「積む」< <i>carrus</i> . cf. <i>Char</i>
craindre 恐れる	俗ラ <i>cremere</i> < <i>remere</i> 「震える」→「恐れる」. ガ語根 <i>crit</i> の影響. cf. アイルランド語 <i>crith</i> 「揺れ」
briser 砕く	俗ラ <i>*brisiare</i> , 後ラ <i>*brisare</i> 「(足で踏んで)ブドウをつぶす」< 古ラ <i>brisa</i> 「ブドウの搾りかす」(仏大) ※アイルランド語 <i>brissim</i> « <i>je brise</i> »

bercer 静かに揺する	古仏 <i>bers, berz.</i> → フ <i>ber</i> (古), <i>berceau</i> ゆりかご
glaner 落穂を拾う	後ラ <i>glenare</i> (6世紀). ガ語根 <i>*glenn-</i>
braire (> brailler) (ロバが) 鳴く	俗ラ <i>*bragere</i> (> <i>*bragulare</i> )
brasser (ビールを) 醸造する	俗ラ <i>*braciare</i> < <i>braces</i> < 古仏 <i>brais</i> 「モルト」 ※「かき混ぜる」の意から. <i>bras</i> 「腕」から比喩として派 生した動詞

### 1.3.ケルト語由来の地名

ローマ人は、基本的にゴール語の地名をそのまま引き継いだ。その中には現代も残っているものがある。ゴール後の地名の多くは、部族名からなっており、それにラテン語の格変化(奪格や位格[処格])をつけた<sup>9</sup>。-s, -x, -zで終わる地名がよく見られるのは、その名残である。その例としてParisなどが挙げられる。

以下に、主なフランス地名とそのケルト名(部族名)を列挙する<sup>10</sup>。

フランス地名	ケルト部族名
Amiens <	<i>Ambiani</i>
Angers <	<i>Andecavi</i>
Arras <	<i>Atrebates</i>
Beauvais <	<i>Bellovaques, Bellovacos</i>
Bourges <	<i>Bituriges</i>
Cahors <	<i>Cadurci</i>
Châlons <	<i>Catuvellauni</i>
Chantilly <	<i>Cantiliacum</i>
Chartres <	<i>Carnutes</i>
Dreux <	<i>Durocasses</i>
Évreux <	<i>Eburovices</i>
Limoges <	<i>Lemovices</i>
Lisieux <	<i>Lexovii</i>
Lyon <	<i>Lugdunum</i>
Meaux <	<i>Meldi</i>
Metz <	<i>Mediomatrici</i>
Nantes <	<i>Namnetes</i>
Paris <	<i>Parisii</i>
Périgueux <	<i>Petrocorii</i>
Poitiers <	<i>Pictavi</i>
R(h)eims <	<i>Remi</i>
Rennes <	<i>Redones</i>

<sup>9</sup> Hamon (1992) p.170, 前島(1986) p.5, リカード(1995) p.14.

<sup>10</sup> Bárdosi & al. (1983) p.158, Hamon (1992) p.15, 山田(1981), リカード(1995) p.14 による。

Rodez	<	<i>Ruteni</i>
Senlis	<	<i>Silvanectes</i>
Saintes	<	<i>Santones</i>
Sens	<	<i>Senones</i>
Soissons	<	<i>Suessiories</i>
Tours	<	<i>Turones</i>
Troyes	<	<i>Tricassi</i>
Vannes	<	<i>Veneti</i>
Verdun	<	<i>Virodunum</i>
Vitry	<	<i>Victoriacum</i>

地名には、地形などの意味が盛り込まれているものがある。

Lyonの古名 *Lugdunum* などに見られる *-dunum* は、ケルト語 *dunon* がラテン語化して *dunum* となったもので、「囲い地、人の住む場所(平地か高地)」を表し、そこから「丘」、次に「砦・城塞」の意となった(前島, Hamon, p.13)。上の Verdun の他, Autun, Châteaudun, Dun, Issoudun, Laon, Loudun などがある<sup>11</sup>。(Hamon)

この *Lug-dunon*, *Lug-dunum* は、Lyon だけでなく、Laon, Loudun の古形でもある。その前半の *Lug* は「光」(ケルトの偉大な神) のことであり、全体として「神の住まい」という意味となる。(Hamon, p.13)

このように、ガリア起源の同じ地名が、現代のフランス各地で、さまざまな形になっている場合がある(堀井, p.104)。たとえば:

ガ *Noviomagus* > Nijon, Noyon, Novion

ガ *Noviodunum* > Nouan, Nion (Suisse)

ガ *Iccidurum* > Yzeures, Yzeure, Izeure, Issoire

Argenteuil, Auteuil, Limeuil, Mareuil, Nanteuil, Valeuil, Vendeuil, Verneuill など  
の地名に見られる語尾 *-euil* (< *iaos*) は「林間の空地」を意味する。したがって、次のように解釈できる地名がある。(Hamon, p.13)

Mareuil「大きな空地」

Nanteuil「谷間の空き地」

Valeuil「ジャガイモの空地」

Bièvres や Bibracte という地名は、ガリア語の *beber* 「ビーバー」に由来する。la Bièvre は「ビーバーの川」ということになる。(Hamon, p.13)

Brive (< *briva*) は「橋」を意味する。(Hamon, p.14)

Condé (< *condate*) は「合流点」を表す。日本語では「落合」というところか。(Hamon, p.14)  
(前島)

Meillant (< *Mediolanum*) は、イタリアの Milan (ミラノ) と同様、「中原」の意味である。(前

<sup>11</sup> これはオランダの地名 Leyden などにも含まれ、英語では down「丘」となった(前島 p.5)。さらにイベリア半島の Coimbra (< *Coimbriga*), Munébriga (< *Mundobriga*) の *-briga* も *dunum* 「要塞」の意味であり、これもケルト語の影響による。(堀井, p.104)



島 p.5)

ガリア語 (*o*)*ritum* は「浅瀬 *le gué*」のことで、昔は大変重要な語だった。現代語では *-ord*, *-ort* という語尾になっている<sup>12</sup>。(Hamon, p.14, 堀井)

Chambord < *Camb-o-ritum*

Niort < *Novi-o-ritum*

語尾に地域性が見られるものがある。たとえば南仏では *-ac*, 北仏では *-ai* や *-i (y)* になったものがある。Juillac と Juilly, Savignac と Savigny で、ともに前者が南、後者が北にある<sup>13</sup>。

ついでながら、ヨーロッパの各国に見られるケルト起源の都市名をいくつか挙げてみよう (Hamon, p.14)。

イギリス :	Londres	< <i>Londinion</i> ,
	York	< <i>Eburacon, Eburacum</i>
スイス :	Genève	< <i>Geneva</i>
ドイツ :	Innstadt	< <i>Blodurum</i> ,
	Kempton	< <i>Cambodunum</i>
オーストリア :	Vienne	< <i>Vindobona</i>
チェコスロバキア :	Brno (ドイツ語 <i>Brünn</i> )	< <i>Eburodunum</i>
オランダ :	Leyde	< <i>Lugdunum</i>
ユーゴスラビア :	Belgrade	< <i>Singidunum</i>
イベリア半島 :	Segovie	< <i>Segovia</i>
	Madrid	< <i>Mageto-ritum</i>
イタリア北部 :	Bergame	< <i>Bergomon</i>
	Bologne	< <i>Bononia</i>
	Vérone	< <i>Verona</i>

## 2.ゲルマン語由来の語

ゲルマン語<sup>14</sup>起源の語は、ケルト語起源に比べればだいぶ多い。『フランス語語源大辞典』(FEW<sup>15</sup>) 全 25 巻において、3 巻 (15-17 巻) がゲルマン起源の語を扱っている (Martin, 2002, p.147) ということから、その比率の高さがうかがえよう。

しかしながら、フランク族の制度の後退と、とくにローマの権利の回復によって、かなりのフランク起源の語が消えた。また、ケルト起源の語の算出の際と同様に、フランク語のもたらしたも

<sup>12</sup> 語尾は、Hamon は *-ritum* とし、堀井は *-oriturum* としている。この語尾はイギリス Oxford などにも見られる。スペイン Madrid も *Magetoriturum* からである。(Hamon, p.14)

<sup>13</sup> Madame de Sévigné の姓も同系である。(堀井)

<sup>14</sup> 以下、ゲルマン語とフランク語という言い方をほぼ同様の意味で用いる。フランク族はゲルマン民族の一部であり、フランク語 *francique* はゲルマン語 *germanique* の一部である。しかしながら、以下の論では厳密に区別せず、参考にした文献が用いている言い方を踏襲することとする。

<sup>15</sup> Wartburg, W. v. 1928-. *Französisches Etymologisches Wörterbuch* (Dictionnaire étymologique du français), Basel, Zbinden (1953 以降), 25 volumes.

のと、侵略以前にラテン語が受けていた、ローマ軍におけるゲルマン戦士の存在に起因するゲルマン語の影響とを区別することは難しい。

というわけで、その語彙数が確定されているわけではない。数世紀の間にガリアに与えた語は約 520 だが、古フランス語に伝わらなかった語彙や地名に含まれるものを加えれば約 700 語を数えるという(前島)。しかしながら、現代フランス語における古ゲルマン語の残り(フランク語起源の語または侵略以前の借用)をすべてまとめると結局 400 語ぐらいのようだ(Grevisse et al., p.160)。

## 2.1. ゲルマン語由来の語の形式的特徴

ゲルマン語彙の代表的な特徴として、次の 2 点が挙げられる。

1. 有音の **h** (**h aspiré**): ゲルマン語では **h** を発音した。 **h** を発音しないラテン語では<sup>16</sup>、この音の聞こえるゲルマン語を借用する際に、これを区別するようになった。すなわち、発音はしないが、語頭では「有音の **h**」として子音扱いにする。

その結果、ゲルマン語からの借用語は、原則として、エリズイオンやリエゾンをしない。

la hache 斧 (×l'hache), le hareng にしん, je haïs 憎む (×j'haïs),  
nous haïssons [nu aisɔ̃] 私達は憎む, など<sup>17</sup>。

それに対し、ラテン語語彙の語頭の **h** は「無音の **h**」として後の母音で始まるものと同じ扱いにする。したがって、エリズイオンやリエゾンをする。

l'heure 時刻 les hommes [lezɔ̃m] 人(複数形)

2. **w** → **g**: ゲルマン語の語頭の **w** の音がラテン語では **g**, **gu** の音[文字]に変化して借用された。これは **w** のもつ強い **[u]** の発音がラテン語になかったため、借用に際して **[g]** を充てたことによる<sup>18</sup>。

\*wantu 「手袋」 > quant > フ gant

werra 「戦争」 > guerre

warda 「番兵」 > garde

wactu 「見張る」 > ラ wactare > 古仏 guaiter > フ guetter 「見張る」

(※英語では watch や wait となった。)

---

<sup>16</sup> 「**H**はラテン語においてすでに視覚のための文字だった。」« **H** est par excellence une lettre pour l'oeil. Elle l'était déjà en latin. » (Yaguello, 1990, *Histoire des lettres*, p.33) すなわち、ギリシア語の気音を示すマークだった。

<sup>17</sup> 例外がある: le héros (英雄)はラテン系の語彙で、女性形は l'héroïne となる。これは、ゲルマン系の le héraut [lə ero] (先駆者・伝令)との類似による影響や、les héros をリエゾンして [lezero] と発音したときの否定的な印象を与える響き(「ゼロ(無)」)の回避などで説明される。

le haut (高い所), la hauteur (高さ)が有音なのは、ラ alto とゲ hoh の融合語であるためだと言われる。(森本 p.54)

その他、ゲルマン起源でも無音の **h** のものがある。heberge (宿泊), hallier (カスミ網(補鳥網)), haussière (曳き網), など。後者 2 語は allier, aussière の綴りもある。allier は後から **h** が加わったが、aussière は **h** がある方が古い。

<sup>18</sup> 前島 p. 13, 森本 p. 133 などによる。

\*wafel「蜜蜂の棚」 > 「ワッフル」 > フ gaufre「ゴーフル」  
(※英語 wafer「ウェファース」)

## 2.2.ゲルマン語由来の語(リスト)

フランク語起源の語はさまざまな分野に関っている。公共生活や、国家組織、行政、軍事関係、とくに武器の名称、建築、農業、田園生活、日常生活の語にわたる。また動植物・身体の部分の名などにも多い。さらに名詞だけでなく、形容詞、動詞にも見られる。彼らは都会生活や座食を好まず、戦争・狩猟・農業・牧畜を好んだ。剣は生きものとして武士の魂と感じたらしい<sup>19</sup>。

### 戦争・軍事関係

フランス語 ※ † =h aspiré (有音のh)	古形 (ゲルマン語 [フランク語]) ※ラ=ラテン語
guerre 戦争	*werra ※ラ bellum を駆逐した。
trêve 休戦, 停戦; 休戦条約	*treuwa 「契約, 条約」
ban 布告・召集	*ban 「宣言」 →動詞 bannir
trappe 落とし穴, 罠 cf. attraper (→動詞)	*trappa 「ひも, 罠」 traper 「踏みつぶす」 < *trappon
meurtre 殺人・殺害	murtre 動詞 murtrir 「殺す」

武器：武器は生き物として武士の魂と感じられた (前島)。

†hache 斧	*hâppia ※ケルト語からという説も (前出)。
lance 槍	lankja + ラ lancea ※ケルト語+フランク語
épée 剣	ラ spatha 「両側に刃のある大剣」
canif ナイフ	*knif 「小刀」 ※英語 knife
flèche 矢	*fliukka 「逃げていくもの」, fliugika 「矢」
gonfalon 軍旗	gundfano 「軍旗」 < *gund 「戦闘」 + *fano 「旗」
†heaume 兜	*helm 「帽子」

### 身分・役職・軍人

garde 番兵 ※→garder 守る, regarder 見守る	*ward
baron 男爵	*baro 「自由な人」
champion 勝者, チャンピオン	*kampjo 「戦う人」 < *kamp 「戦場」 ※もとは古ラ campus 「戦場« champ de bataille »」からの借用。(ラ→ゲ→仏)
maréchal 元帥・軍曹	*marhskalk 「馬の世話をする召使」 < marh 「馬」 + skalk 「召使」 ※前半はケルト語から借用 cf. ブルトン語 marc'h 「馬の頭, 鼻づら」
échevin 市 [町, 村] の助役	skapin 「判事」

### 制度・組織

bourg 町・市場町	*burg 「要塞都市」→中世ラ burgus 「小都市」
-------------	-------------------------------

<sup>19</sup> Bárdosi & al., Grevisse et al., Hamon, 前島, 森本, Walter などによる。

fief (封建時代の) 封土, 領地	* <i>fehu</i> 「家畜」 ※→後ラ <i>feudum, feodum</i> (→ féodal 大地主・封建制の)
gage 抵当・保証	* <i>waddi</i> ※独語 <i>Wette</i> 「賭け, 無謀な行為」
garant 保証 (人)	* <i>warjan</i> 「本物であることを保証すること」
†hameau 小集落	* <i>haim</i> ※独 <i>Heim</i> , 英 <i>home</i> 「家庭」
rang 列・並び・順位・階級	* <i>hring</i> 「輪・円」 ※独・英 <i>ring</i>

## 建築

beffroi 見張り塔・塔車	* <i>bergfripu</i>
donjon 天守閣	* <i>dungjo</i> 「殿様の塔」より.
salle 部屋. ホール	* <i>sal</i>
tuyau 管	* <i>thuta</i> ※ <i>thut</i> 「鳴らす」(擬音語動詞)
loge 小屋, 守衛室	* <i>laubja</i> 「葉型飾りのある (建築様式)」
maçon 石工	* <i>makjo</i> ※→ラ <i>machio</i> 「作る」
†haie 垣根	* <i>hagja</i>
jardin 庭	* <i>gart, *gardo</i> ※英 <i>garden</i> 「庭」
parc 公園	ラ <i>parricus, parcus</i> ゲルマン起源(GR)

## 土地・地形

falaise 断崖	* <i>falisa</i>
marais 沼地	* <i>marisk</i> 語幹 * <i>mari-</i> 「海, 沼」
mare 池・沼	* <i>mara</i> ※marais と関係
fange 泥水	* <i>fanga</i>

## 日常生活

fauteuil 肘掛椅子	* <i>faldist</i> 「折り畳み椅子」
banc ベンチ・長椅子	* <i>bank</i>
flacon 小瓶	<i>flaska</i>
†hanche 腰	* <i>hanka</i> ※中期オランダ語 <i>hanke</i> 「腰」
†hanap 大杯	* <i>hnap</i>
†housse 家具・衣服のカバー	* <i>hulftia, *hultia</i>
†huche 長櫃 (ながびつ)	古高地ドイツ語 * <i>hutta</i> 「避難させる場所」
chaton 指輪の爪・石	* <i>kasto</i>

## 飲食物・料理関係

beignet 揚げ物	<i>beigne</i> 「こぶ」と形の類推から.
soupe スープ	* <i>suppa</i> < ゴート語 <i>supôn</i> 「味をつける」 ※または形容詞 <i>suppus</i> < <i>supinus</i> 「横たえた, 返された」から. パン切れをスープに浸したこと から(Guiraud).
bacon ベーコン	* <i>bakko</i> 「ベーコン」
gigot 羊腿肉	* <i>gibbicare, giber</i> 「手足を揺り動かす」, * <i>gibe</i> 「脚, 腿」(→ Gibecière 革袋・獲物袋; guibole 脚, guinguer, regimber 足で蹴って逆らう)
bière ビール	中世高地独語または中世オランダ語 <i>bier</i>
gâteau ケーキ・菓子	* <i>wastil</i> 「食糧」 ※ガロ・ロマン語 * <i>vasitare</i> « faire une pâte »
gaufre ゴーフル	* <i>wafel</i> 「蜜蜂の棚」

rôtir 焼く, あぶる	<i>*raustjan</i> (独 <i>rösten</i> , 英 <i>roast</i> ) ※ラ <i>rustum</i> 「(火にかけて供する) 木苺の山盛り」からという説(Guiraud)も.
---------------	---

#### 衣服

robe 服・ドレス	<i>*rauba</i> 「戦利品・獲物」→「脱がせた服」
gant 手袋	<i>*want</i>
écharpe マフラー, 懸章	<i>*skirpa</i> 「イグサの籠 (かご)」, <i>*excapere</i> 「引き裂く」(→繊維を裂いてできる帯)
poche ポケット	<i>*pokka</i> ←ガロ・ロマン語 <i>popp-</i> 「小カバン」
coiffe 帽子	<i>*kufia</i> 「帽子」« <i>casque</i> »
guêtre レッグ・ウォーマー	<i>*wrist</i> 「足の甲」(Bloch)
blouse ブラウス	古形不明. おそらくゲルマン語(Dauzat et al. 1971, p.93).

#### 娯楽

danser 踊る	<i>*dintjan</i> 「あちこち動き回る」
gigue ジグ (舞踊楽曲)	<i>*giga</i> 「バイオリン」(前島) ※「腿, 脚」< <i>gigot</i> 「腿肉」(GR)
anche (管楽器の) リード, 舌	<i>*ankja</i> 「骨髓腔」→「樋」「のど・首」
joli 美しい, 可愛い	<i>jolif</i> 「陽気な, 快活な」 <i>jeohl</i> 「クリスマス」(前島) 古スカンジナビア語 <i>jól</i> 「真冬の大きな祭り」(GR)

色の名 ※色名はゲルマン起源のものが多い (松原).

blanc 白い	<i>*blank</i> 「輝くような」(GR) 「空白」(松原)
bleu 青い	<i>*blao</i>
blond 金髪	<i>*blund</i>
brun 茶色の	<i>brūn</i> ※ラ <i>brunus</i> , 独 <i>braun</i> , 英 <i>brown</i>
gris 灰色の	<i>*gris</i> ※独 <i>greis</i>
fauve 黄褐色の	<i>*falw</i> ※「猛獣」の意味も

#### 感情

émoi 感動・興奮	<i>*magan</i> 「できる」 ※→「魔術師」→「力を奪う」→「動揺させる」
gai 陽気な	ゴート語 <i>gáheis</i> 「素早い, 活発な」
orgueil 傲慢(な)	<i>*urgoli</i> 「自慢・誇り」
haine 憎しみ	語根 <i>*hat-</i> →俗ラ <i>*hatīna</i> ※ <i>hair</i> < <i>*hatjan</i> < ゲルマン語 <i>*χatōjan</i>
hâte 性急, 急ぎ	<i>*harst</i> 「網焼き・焦燥」+ラ <i>hasta</i> 「槍」
hâter 急ぐ	※→英 <i>haste</i>
honte 恥	<i>*haunipa</i> , <i>*haunita</i> 「軽べつ (する)」
honnir 軽蔑する	(同上)
hardi 大胆な	<i>*hardjan</i> 「固くする」, 形容詞 <i>*hart</i> 「固い」
s'enhardir 自信がつく	
moue ふくれ面	<i>*mauwa</i> ※「口」を表すオノマトペ(GR)

#### 動物

étalon 種馬	* <i>stal(l)o</i> < <i>stal</i> 「馬小屋・厩舎」
renard キツネ	固有名詞 <i>Reginhart</i> (= * <i>ragin</i> 「助言 conseil」 + * <i>hart</i> 「強い fort」) ※「狐物語」の主人公の名前が、それまでの <i>goupil</i> を淘汰した.
†hase ウサギ	独 <i>Hase</i> 「野ウサギ lièvre」
chouette フクロウ	* <i>kawa</i>
†héron アオサギ	* <i>haigro</i>
épervier 鷹の一種	* <i>sparwâri</i> ※後ラ <i>sparvarius</i>
gerfaut シロハヤブサ	<i>girfalko</i> ※ <i>gir</i> 「ハゲワシ」 + <i>falk, fauc</i> 「ハヤブサ」 ( <i>faucon</i> の主格)
alérion 鷺	* <i>adalaro</i>
freux ミヤマガラス	<i>hrók</i> ※高地ドイツ語 <i>hruoh</i>
mésange シジュウカラ	* <i>meisinga</i>
crapaud ヒキガエル	* <i>krappa</i> 「鉤・フック」, * <i>krappon</i>
†hanneton 黄金虫	* <i>hano</i> 「雄鶏 coq」 ※ ゲルマン諸語においては、いくつかの虫の名前がこの語根に由来する (GR).
(loup-)garou 狼男	<i>wariwulf</i> 「人狼」 ※ loup は強調のために追加された冗語 (GR).

#### 魚介

†hareng ニシン	<i>haring</i>
esturgeon チョウザメ	* <i>sturjo</i>
écrevisse ザリガニ	* <i>krebitja</i>
crabe カニ	中世オランダ語 <i>krabe</i> または古ノルド語 <i>krabbi</i>

#### 植物

bois 木, 森	* <i>bosk</i> 「やぶ, 茂み」
blé 小麦	* <i>blād</i> 「穀物」 ※ガリア語 * <i>blato</i> 「小麦」
†hêtre ブナ	* <i>haistr, hester</i> ※ * <i>haisi</i> 「やぶ」 から.
†houx ヒイラギ	* <i>hulis</i>
gerbe 麦などの束・花束	* <i>garba</i> 「穀物の束」
cresson クレソン	* <i>kresso</i>
bûche 薪	* <i>buskum</i>
grappe 房	* <i>krappa</i>
framboise キイチゴ	* <i>brambasia</i> 「熟した」 ※ fraise 「苺」 の影響で語頭が f になった.
roseau 葦	* <i>raus</i>
mousse 苔・泡	* <i>mosa</i>

#### 身体

échine 脊椎	* <i>skina</i> 「木の棒」 → 「針, 長い骨」 → 「脊柱」
giron 膝・ふところ	* <i>géro</i> 「先の尖った素材」
†hanche 腰	* <i>hanka</i> ※中世オランダ語 <i>hanke</i> 「腰」
lippe 厚い下唇	中世オランダ語 <i>lippe</i> 「唇」 ※独 <i>Lippe</i> .
téton 乳房	<i>tétine</i>

#### 動詞

attraper捕える < a + trappe (↑)	<i>*trappa</i> 「ひも, 罠」 <i>traper</i> 「踏みつぶす」 < <i>*trappon</i>
blessen 傷つける	<i>*blettiare, *blettjan</i> 「傷つける」
haïr 憎む	<i>*hatjan</i> < ゲルマン語 <i>*χatōjan</i> ※英 <i>hate</i>
garder 守る, regarder 見守る	<i>*ward</i>
gagner もうける, 得る・稼ぐ regain 回復	<i>*waidanjan</i> 「食糧, 戦利品・獲物を手に入れる」
marcher 歩く	<i>*mark</i> 「歩をしるす」
galoper (人・馬が) 駆ける	<i>*wala-hlaupan</i> < <i>*hlaupan</i> 「跳ねる, 走る」
gravir よじ登る	<i>*kraujan</i> 「引っ掻く」 < <i>*krawa</i> 「爪」
gratter ひっかく	<i>*kratt</i>
taper [手で] 打つ	<i>tapon</i> ※またはオノマトペ
frapper たたく	<i>*hrappan</i>
épeler 綴りを言う	<i>*spell</i> 「語る」
guérir 治す・回復する	<i>*warjan</i> 「抑制する, 防御する」
choisir 選択する	<i>kausjan</i> 「試す, 味わう」
tomber 落ちる, 倒れる	<i>*tûmon</i>
soigner 世話をする	<i>*sunnj</i> 「世話をする・面倒をみる」
éblouir 目をくらませる・驚嘆させる	<i>blaudi</i> 「弱い」
héberger 泊める ※無音のh	<i>*heriberg</i> < <i>*heri, *hari</i> 「軍隊」 + <i>*bergan</i> 「防護する」
gauchir ゆがむ・反る・ねじれる → gauche 曲がった, 不器用な	<i>*wenkjan</i> 「揺れる」 <i>*walkan</i> 「押しつぶす」 ※ガロ・ロマン語 <i>*valgicare</i> , ラ <i>valgus</i> 「曲がった・不安定な脚」 からという説も.
(その他の動詞) broder刺繍する, broyer砕く・つぶす, fourbir磨く・研ぐ, grogner鳴く・うなる, lécherなめる, lorgner欲しがる, rechigner渋る・嫌がる, téter吸う, trébucherつまづく, trépigner足を踏み鳴らす, trotter小走りする, など.	

#### 形容詞

franc 正直な	<i>Frank</i> 「フランク族」
frais 新鮮な・ひんやりした	<i>*frisk</i>
laid 醜い	<i>*laip</i>
riche 豊かな	<i>*rikki</i> < ガリア語 <i>rix</i> 「王」 ※cf. ケルト語起源の語
sur 酸っぱい	<i>*sur</i> cf. 独 <i>Sauer</i>
(その他の形容詞) blafard 生気のない, déluré 機転のきく・抜け目のない, félon 不実な, fourbe 狡猾な, †hardi (↑上述), †hâve やつれた, madré 狡猾な, taquin からかい好きな, revêche とつつきにくい・つつけんどんな, など.	

#### 副詞

guère あまり (…ない)	* <i>waigaro</i> 「たくさん」
maint 多くの	ゲルマン語 * <i>manigipô</i> 「大量」 またはガリア語 <i>mantî</i> ※→英 <i>many</i>
trop 過剰に cf. § 1.2.2	* <i>throp</i> 「村, 一群, 密集」

## 2.2. « trop »について

*trop*という語の歴史は変化の連続である<sup>20</sup>。Walterによれば、その起源はフランク語 *thorp* 「村」に遡る。これは次のような地名の中に容易に見出せる。

*Le Torp-Mesnil* (Seine-Maritime), *Le Torpt* (Eure)

その他にも、やや分かりにくいのが *Tostes* (Eure, Calvados), *Tôtes* (Seine-Maritime, Calvados)などの地名にも隠れているという。

形は, *thorp* → *throp* → *trop* というように変化した。ここには音位転換(*métathèse*)が見られるが、この現象はそれほど珍しいものではない。たとえば同様の例には, *formaticum* → *fromage* (チーズ), *berbix* → *brebis* (雌羊) などがある。

意味は, 「村」→「村の全住民」→「一緒に歩む人の一団」という変化を経て, 「大量」の意となり, さらに「過剰」となった。また文法範疇も名詞から副詞になった。

古い「村」という意味は, ドイツ語 *Dorf* として地名 *Düsseldorf* などに残っている。フランス語では, 「一団」の意味から名詞 *troupe* (部隊) とその派生語 *troupeau* (群れ) が作られた。

最近では, 若者の使い方において「過剰」のもつ悪い語感が薄れ, むしろ好ましい意味で形容詞として用いられている。

*Lui, il est trop.* = « il est impressionnant » (Walter) 「彼はすばらしい」

## 2.3.ゲルマン語由来の地名・人名

フランスの地名の多くがゲルマン語形で, とくに北部, 東部, ノルマンディー地方に多い。ピカルディの地名の大部分はゲルマン系だという。対して, Oise-Aisne 県以南ではゲルマン系地名ははるか少ない<sup>21</sup>。

地名の中のゲルマン語要素をいくつか紹介してみよう。

*bah* 「小川(*ruisseau*)」。変異形 *-bais* (*baix*), *-bach*, *-bec*<sup>22</sup>。

例: *Bolbec*, *Caudebec*, *Forbach*, *Roubaix* など。

(ドイツ人名 *Bach* もこれである。cf. 音楽家 Jean-Sébastien *Bach*)

*ham* 「村(*village*)」。

例: *Ouistreham* (=「西の村」*le village de l'Ouest*)

*budh* 「避難所(*abri*)」。 *-boeuf*, *rbeuf* に変換されることもある。

<sup>20</sup> Walter, H. 2001. *Honni soit qui mal y pense*. p. 56

<sup>21</sup> 本節の内容, データは, 主に Hamon, 前島, 森本による。

<sup>22</sup> ガリア語起源の *le bec* とは別。混同しないように。(Hamon, p.22)



例: *Cricqueboeuf*, *Elbeuf*, *Quillebeuf*<sup>23</sup>など.

*dieppe*「深い」*profond*「形容詞」.(→英語 *deep*)

例: *Dieppedalle*(=「深い谷」*vallée profonde*)

また、古いガリア語系都市名には、ゲルマン系の名におきかえられたものがある。たとえば、ゲルマン名 *Strasbourg* は「道の町」(*le bourg de la route*) という意味だが、もとはガリア名 *Argentorate* (=「銀の砦」*la forteresse de l'argent*) だった。

フランス人名(姓、名)にもゲルマン起源が多い。たとえば次のような名前はゲルマン語から意味が説明できる。

Adolphe (*ada*「高貴な *noble*」+ *wolf*「狼 *loup*」=「高貴な狼」*noble-loup*)

Bernard (*bern*「熊 *ours*」+ *hard*「強い」*fort*」=「熊のように強い」*fort comme l'ours*)

Edouard (*ed*「財産 *biens*」+ *ward*「番人 *gardien*」=「財産の番人」*gardien des biens*)

Hubert (*hug*「知性 *intelligence*」+ *bert*「優秀な *brillant*」)

Wolfgang (*wolf*「狼 *loup*」+ *gang*「歩き *allure, pas*」)

Renard (< *Reginhart* = *\*ragin*「助言 *conseil*」+ *\*hart*「強い」*fort*)<sup>23</sup>

この最後の例 *Wolfgang* は、その敷き写し(*calque*)としてフランス名 *Pasdeloup* も作られている。以下、ゲルマン系の人名を列挙する。(分かる範囲でカッコ内に古形を記す。)

Adolphe, Albert, Alfred, Amaury, Armand, Arnaud, Arnoul, Augier (*Audgair*),  
Aymard, Baudouin, Baudry (*Baldrik*), Béranger (*Beringair*), Bernard  
(*Berinhart*), Berthe, Bertram (*Berhtramn*), Bertrand, Charies (*Carl*), Conrad,  
Diderot (*Diether*), Edgar, Edouard, Ernoul (*Arnulf*), Ferry, Frédéric, Fréry  
(*Fridurik*), Friedmann, Garnier (*Warinhari*), Garnies, Gautier, Gaultier  
(*Walthari*), Geoffroy (*Gaufrid*), Gérard (*Gairhart*), Gilbert (*Gislberht*),  
Godefroy (*Godafrid*), Guillaume (*Wilihelm*), Hardouin, Henri, Hermand  
(*Hariman*), Herriot (*Haimrīk*), Leger (*Leodgair*), Louis (*Ludwig*, *\*Hlōdwīg*),  
Mathilde, Odier (*Audhari*), Odile, Philibert, Raoul, Renard (*Reginhart*),  
Renaud (*Raginwald*), Richard (*Rikhard*), Robert (*Hrōþberht*), Rodrigue, Roger  
(*Hrōþgair*), Roland, Siegfried, Thibaud, Thierry, Thierry (*þeodrīk*), Thiers  
(*þeodhari*), Walter, Wolfgang, など。

なおフランク(ゲルマン)系の名はイタリア人 Garibaldi, (Dante) Alighieri, スペイン人 Alfonso (Alafuns), Roderigo (Roderich) などにも入っている。

### 3.ラテン語由来の語

<sup>23</sup> この Renard の例のみ GR による。

ガリア語、ゲルマン語の影響を受けているというものの、基本はラテン語であるため、ラテン語起源の語がもっともフランス語に多い。

### 3.1.民衆語と学識語

ラテン語起源の語彙はしばしば 2 種に区別される。すなわち、民衆語 *mots populaires* と学識語〔学者語〕*mots savants* である。

**民衆語**は、非常に古くから現在まで使用され続けているラテン語である。日常ラテン語、俗ラテン語、後期ラテン語 *bas latin* から途絶えることなく使われ続けており、基本語彙の根幹をなす。Hamon(1992, p.47)は次のような例を挙げている：

形容詞：chaud, droit, faux, froid, rouge, vert, vrai；  
 名詞：boeuf, bonté, chèvre, dame, douleur, feu, fille, fils, frère, île, joie, jour, liesse 歓喜, lieu, maire, mère, nuit, père, peur, sire, soeur, vache, veau；  
 動詞：aller, boire, dire, écrire, faire, lire, manger；  
 代名詞：il, je, nul, on, personne, qui, rien, tu；  
 不変化語(副詞, 接続詞, 前置詞)：comme, en, et, où, pour, quand, si, sur, tant.

**学識語**は、主に16世紀ごろのラテン主義の流行の結果、知識人や専門家たちが古典ラテン語や文筆家のラテン語を敷き写したり、真似て作ったりした語である。たとえば次のようなものがそれである(同上書)：

形容詞：absurde 不合理な, exact 正確な, facile, fécond, prudent, tardif；  
 名詞：admiration 感嘆・称賛, argument 論拠, créature 創造〔被造〕物, abnégation 放棄, doctrine, domicile, édifice, faveur, grâce, instrument, justice, opinion, patience, religion, vérité；  
 動詞：agiter 揺り動かす, condamner, exercer, habiter, tempérer.

### 3.2.民衆語と学識語の特徴

形態面では、民衆語は民衆の古くからの形成、すなわち言語の規則的な音声変化に対応する民衆の自然発生的な形成によるもので、一般的な音声変化を受けている。しばしば非常に変形され、短くなっている。(いわゆる言語の経済性の法則によるものである。)

他方、学識語は後世の学者や識者の学術的な作成であり、しばしば直接写し取られているため、民衆語より遅くできたものであるにもかかわらず、よりラテン語に近い<sup>24</sup>。

Bárdosi & al. (1983, p.221)は、具体的に、次のような基本的特徴を指摘している。

民衆語	学識語
1 ラテン語にあった音節上の強勢アクセントの維持	1 ラテン語の強勢アクセントの移動

<sup>24</sup> Bárdosi & al. (1983, pp.221-222), Hamon (1992, pp. 47-48).

2 主強勢音前後の弱母音の削除	2 主強勢音前後の弱母音の維持
3 母音間子音の消滅	3 母音間子音の維持

要するに、民衆語は、長い年月の間にラテン語語彙の強い音が残し、弱い音が消え、「母音＋子音＋母音」は子音が消えて「母音＋母音」(さらに「単母音」)となるなどの変化を受けた結果をしばしば示している。それに対し、学識語では、ラテン語語彙の形をあまり変えずに採用し、それをフランス語風に発音しているのである。

学識語は、一般に、語末だけがフランス語化しているという指摘もある(Tomassonne, 2001, p.132)。

また、民衆語は語頭の *c* が「口蓋化」しているのに対し、学識語ではそうっていないという(Martin, 2002, pp. 139-140)。たとえば：

民衆語：*chair*(肉体), *charcutier*(豚肉屋), *charnel*(肉体的な), *s'acharner*(熱中する), など。

学識語：*carnivore*(肉食性の), *carne*(肉の), *incarnation*(化身), *s'incarner*(具現化する), など。

意味の面から言えば、民衆語は時代を通じて用いられてきた、日常的で気取らない言い方であり、具体的な内容をもつものが多い。それに対し、学識語は新しい時代や社会の流れに対応するために取り入れた専門用語や抽象的な内容をもつものが多い。

### 3.3.二重語

さらに、フランス語では、この民衆語と学識語という 2 種類のラテン語語彙の間に、「二重語」という特殊な関係が生じることがある。

二重語doubletは「同じラテン語語彙から出た異なる結果であり、一方は自然な変化によって、他方は元のラテン語形を後になってから借用することによってできたものである。」(Walter, 2001, p. 58)

「同語源の一对の語で、一方はその言語の他の語から帰納できるような音声法則の働きの結果であり、他方はその親言語*langue mère*(ラテン語)の語をもとにつくられた直接の敷き写し*calque*で、最少の適応操作しか受けていないものであるようなペア<sup>25</sup>」(Dubois et al., 1973, p.168)をいう。

すなわち、同語源のラテン語語彙からできた民衆語と学識語のペアのことである。例えば、*livrer*(配達する)と*libérer*(解放する)がそれである。どちらもラテン語*liberare*に由来する。前者*livrer*はラテン語*liberare*が少しずつ変化してできた民衆語である。母音*e*が落ち、破裂音・両唇音«*b*»が摩擦音・歯唇音«*v*»になり弱くなっている。一方、後者*libérer*は*liberare*を

<sup>25</sup> 「ただし、F. de Saussureは、二重語doubletという表現を不適切だと考える。2語のうちの一方だけが正常な音声変化を受けており、他方は原語以来凝固したままの形式だからだ。」(同書) ※ 本来、doubletには「模造品、重複しているもの、ぞろ目」といった意味があるが、二重語は形式の似ていないものも多い。

復活させて後から作った学識語である。ほとんどラテン語と同形で、母音、子音がほぼ維持されているが、語末が現代フランス語-er動詞と同様の形式になっている。

二重語のペアは800以上あるという(Grevisse et al., 2011, p.155)。

ただし、この例からもわかるように、それぞれの二重語の学者語と民衆語は、同義語ではなく、全く異なる意味をもつことが多い。(Walter, 同上)。

稀には、民衆語frêle「弱々しい・はかない」－学識語fragile「もろい・弱い」(ラテン語 *fragilem, fragilis*) のように、ほぼ同じ意味をもつこともある。しかし、少なくとも意味的、文体的なニュアンスの違いがある。すなわち、一般的に民衆語に比べて学識語が冷静で厳密である。(Bárdosi & al. 上掲書, p.222)

同じ意味だったため、学識語に取って代わられた民衆語もある(同上)。すなわち、下の例では、カッコ内の民衆語は現代に残らなかった。

(民衆語)	学識語		ラテン語
(ameor)	amateur	愛好者	<i>amator</i>
(avorir)	abhorrer	嫌悪する	<i>abhorrere</i>
(brief)	bref	短い	<i>brevis</i>
(colloite)	collecte	募集・収集	<i>collecta</i>
(detteur)	débiteur	債務者	<i>debitor</i>
(enterver)	interroger	質問する	<i>interrogare</i>
(lëun)	légume	野菜	<i>legumen</i>
(soutil)	subtil	精緻な・微妙な	<i>subtilis</i>
(utle)	utile	役立つ	<i>utilis</i>
(vitaille)	victuaille	食糧の蓄え	<i>victualia</i>

同じ意味でも両方が残った非常に稀な例もないわけではない。roideとraide「硬い」である。前者の古形に対し後者の新形ができたが、古形も新形とともに残った。(Grevisse et al., 上掲書, p.156)

名詞と形容詞のペアも多い。例えば：

民衆語		学識語		ラテン語
cœur	心・心臓	cordial	心からの・心のこもった	<i>cordis</i>
mer	海	marin	海の	<i>mare</i>
peuple	民衆	populaire	庶民の・人気のある	<i>populus</i>
vie	生活・一生	vital	生命の	<i>vita</i>
voix	声	vocal	声の	<i>vox, vocis</i>

このほか、二重語という現象によって、さまざまな文法現象や語源を説明できることがある。

### 3.3.1.形態的二重語

同じラテン語彙の 2 つの形態からできた二重語がある。(Bárdosi & al., pp.223-225.,

### 3.3.1.1.主格 vs 対格

ラテン語の主格nominatif(古仏語主格cas sujet)と対格accusatif(古仏語制辞格cas régime)がそれぞれ異なる語となったものがある。

**onとhomme:**

ラテン語主格*homo*がフランス語主語代名詞onとなり、対格*hominem* (> *ome*)が普通名詞*homme*となった。

**pâtreとpasteur:**

ラテン語主格*pastor*がフランス語名詞*pâtre*(羊飼い)となり、対格*pastorem*が名詞*pasteur*(牧師)となった。sの維持に、学識語としての特徴が現れている。

**copainとcompagnon:**

ラテン語主格*companiono*がフランス語名詞*copain*(友達, 仲間)となり、対格*companionem*が名詞*compagnon*(仲間, 連れ合い)となった。前者はくだけた言い方で、後者は普通、またはややあらたまった言い方というように、文体的なニュアンスにも民衆語と学識語の違いが現れている。

### 3.3.1.2.単数形 vs 複数形 → 男性形 vs 女性形

ラテン語中性名詞からフランス語に移行した際に、単数形が男性名詞に、複数形が(-a が女性単数形と取られ)女性名詞となり、それぞれ異なる名詞となったものがある。

**bras と brasse:**

ラテン語中性単数形 *bracchium* からフランス語 *le bras* (腕) ができ、複数形 *braccia* から *la brasse* (平泳ぎ) ができた。

**cor と corne:**

ラテン語中性単数形 *cornu* がフランス語 *le cor* (角笛) となり、複数形 *cornua* が *la corne* (つの) となった。

**grain と graine:**

ラテン語中性単数形 *granum* はフランス語 *le grain* (粒) となり、複数形 *grana* は *la graine* (種) となった。

**tourment と tourmente:**

ラテン語中性単数形 *tormentum* からフランス語 *le tourment* (悩み), 複数形 *tormenta* から *la tourmente* (動乱) ができた。

**vaisseau と vaisselle:**

ラテン語中性単数形 *vascellum* からフランス語 *le vaisseau* (船), 複数形 *vascella* から *la vaisselle* (食器(洗い)) ができた。

フランス語になってから生じた形態変化によってできた二重語もある。

たとえば、古仏語制辞格cas régime単数形*col*とその複数形*cous*から、それぞれ*col*(襟)と

**cou**(首)ができた。同様にして, **martel**(槌(古)<sup>26</sup>)と**marteau**(ハンマー)や, **appel**(呼び声, 呼びかけ)と**appeau**(鳥笛, おとり)などがある<sup>27</sup>。

### 3.3.1.3. 無強勢形 vs 強勢形

いくつかのラテン語の代名詞と形容詞は, 強勢の有無によって, フランス語に2つの異なる形式を作った。(Bárdosi & al., pp.224-225)

無強勢形atone	強勢形tonique
me	moi
te	toi
se	soi
que	quoi
mon	mien
ma	mienne

### 3.3.2. 動詞不定形の二重語

-oir動詞のいくつかは, 並立形として-reまたは-irをもっていたが, のちに消えた。(Bárdosi & al., p.224)

ラテン語	(民衆語→消滅)	学識語
<i>concipere</i>	→ (*conçoivre)	concevoir
<i>percipem</i>	→ (*perçoivre)	percevoir
<i>recipere</i>	→ (*reçoivre)	recevoir
<i>movere</i>	→ (*muevre)	mouvoir

#### **courre**と**courir** (走る)

**courre**はその二重語**courir**ができたため, 中世末期に消えた。それでも現代語では, まだ狩猟用語の中で不定法でのみ用いられている。(同上)

*courre le cerf*(鹿えを狩る)

*laisser courre les chiens*(犬を狩りに走らせておく)

*courre un cheval*(馬を走らせて狩りをする)

*une chasse à courre*(猟犬を使い騎馬で行う狩猟)

#### **fleurir**と**florir** (比喩的意味) :

前者は「花を咲かせる」, 後者は比喩的な意味である。(Hamon, 1992)

*Les vergers fleurissaient à saison.* 果樹園は季節の花で一杯だった。

*Les arts florissaient à cette brillante époque.*

<sup>26</sup> 現代語では *se mettre martel en tête*「気をもむ」でのみ使用。

<sup>27</sup> 同様の形態の対応は, 一部の形容詞の形態変異にも見られる。たとえば, *vieux-vieil*, *beau-bel*, etc. (Grevisse et al., p.156)

この輝かしい時代に芸術が花開いていた。

**plaisir**と**plaire** :

**plaisir**は名詞となり、不定法は**plaire**に代わった。(Grevisse et al., p.156)

**béer**(咄然とする)と**bayer**:

同じ動詞から並行して2つの変化形ができ、それが二重語になった。(同上)

擬音語からできたラテン語動詞**batare**→古仏語**béer**と**baer**→現代語**béer**と**bayer**。

さらに**bayer**から**baïller**(あくびをする)ができた。

**conter** (語る) と **compter** (数える) :

ラテン語**computare**から**conter**ができたが、のちに語源的な綴りを取り入れた**compter**が作られた。(同上)

### 3.3.3.動詞活用形と二重語

同じ動詞が2種の活用をもつものがある。これらは二重語が原因となっていることが多い。

たとえば、**balayer**や**payer**など-ayerで終わる動詞の現在形、未来形、条件法現在形に見られる。(Hamon, pp. 197-202)

*je balaie*と*je balaye*

*je paierai(s)*と*je payerais*

**asseoir**(座らせる)(現在形、半過去形、未来形、命令形)も同様に2種の活用を持つ。

*j'assieds* / *j'assois* ;

*j'assevais* / *j'assoyais* ;

*j'assiérai* / *j'assoirai* ;

*j'assiérais* / *j'assoirais* ;

*assieds-toi* / *assois-toi* ;

*asseyons-nous* / *assoyons-nous* ;

*asseyez-vous* / *assoyez-vous*

第1群(-er)動詞と第2群(-ir)動詞ができたものがある。

**forcer**(強いる. *il force*)

**forcir**(たくましくなる. *il forcit*)

**calmer**(なだめる. *il calme*)

**calmir**(静まる, 風ぐ. *il calmit*)

**tousser**(咳をする. *il tousse*)

古形**toussir**(*il toussit*)

第3群動詞と第2群動詞になったものがある。

**ressortir de**(外に出る. *il ressort*)

**ressortir à**(属する. *il ressortit*)

*Il ressortait du pré.* 草地から外に出る。

*Cela ressortissait au juge des enfants.* それは子供たちの判断の問題だ。

### 3.3.4.現在分詞と形容詞・名詞

分詞形-ant (-ent)の二重語の多くは、一方はラテン語分詞の変化から、他方はフランス語分詞接尾辞から説明される(Bárdosi & al., p.224)。同じ動詞から並行して2つの変化形ができていったものが多い(Grevisse et al., p.156)。

現在分詞(学識語)と形容詞(民衆語)のペア<sup>28</sup>:

<sup>28</sup> Grevisse et al., p.156 ., Hamon, pp. 197-202., Bárdosi & al., p.224.

**négligeant**(おろそかにする)  
**pouvant**(できる)  
**précédant**(先行する)  
**sachant**(知っている)  
**suffoquant**(息苦しくさせる)  
**valant**(~する価値のある)  
**vaquant**(休む)  
**bayant**(ぽかんと開けている)  
**seyant**(似合う)

現在分詞と名詞のペア (Bárdosi & al.):

**aimant**(愛している)<sup>29</sup>  
**pondant**(産む)  
**sachant**(知っている)  
**servant**(役立つ)

**négligent(e)**(怠慢な)  
**puissant(e)**(強い)  
**précédent(e)**(前の, 先立つ)  
**savant(e)**(学識のある)  
**suffocant(e)**(息苦しくさせる(ような))  
**vaillant(e)**(仕事熱心な)  
**vacant(e)**(空いている)  
**béant(e)**(大きく開いた)  
**séant(e)**(ふさわしい, 適切な)

**l'amant**(愛人)  
**le ponant**(西, 西風)  
**le savant**(学者)  
**le sergent**(伍長); **le servant**(ミサの侍者)  
**la servante**(女中, 家政婦)

過去分詞と形容詞のペア(Hamon, pp. 197-202):

**absous**(過ちを許す)  
**béni(e)**(祝福された)

**absolu**(絶対の)  
**bénit(e)**(祝別された)

※**pain béni**祝別されたパン, **eau bénite**聖水

**dissous**[dissoute](溶けた)  
**résous**[résoute](解決した)

**dissolu**(放縦な, 放埒な)  
**résolu**(断固・毅然とした)

### 3.3.5.ラテン語 vs 外国語・方言

フランス語ではなく, 外国語や方言の導入によって二重語をつくるものがある<sup>30</sup>. ただし, この場合も, 次のように, もとはすべてラテン語であることが多い.

民衆語

**chaire**(教壇) ← ラ *cathedra*  
**châsse**(聖遺物箱) ← ラ *capsam*  
**chef**(長) ← \**cápum* ← ラ *cáput*  
**dame**(婦人) ← ラ *dóminam*

**(r)échapper**(逃れる)

← 俗ラ\**excappáre*

**échelle**(はしご, 階層) ← ラ *scálam*

**équerre**(直角定規) ← 俗ラ\**exquádra*

**noir**(黒) ← ラ *nigrum*

学識語

**chaise**(椅子) ← シャンパーニュ方言 *chaise*

**caisse**(ケース, 箱) ← オック語 *caissa*

**cap**(岬) ← プロヴァンス語 *cap*

**duègne**(付添女) ← 西 *duena*

**madone**(聖母) ← *madonna* ← 伊 *donna*

**rescapé**(生存者)

← *rescaper* ← ピカール方言 *escaper*

**escale**(寄港) ← 伊 *scala*

**escadre**(艦隊) ← 伊 *squadra*, 西 *escuadra*

**nègre**(黒人) ← 西, ポ *negro*

<sup>29</sup> *aimant* には「情のある, 優しい」という形容詞と, 「磁石」という意味の名詞もある.



### 3.3.6.二重語と語源

二重語のリストを眺めていると、そこに意外な語と語の関係が浮かび上がると同時に、語源を知る手がかりが見えてくることがある。いくつかの例を挙げてみよう<sup>31</sup>。

#### sangler(イノシシ)と singulier(単数)

前者が民衆語、後者が学識語である。野生の豚 *porc* であるイノシシは、山中を単独で行動するため、ラテン語では *porcus singularis*(単独の豚)と言われていた。そこから *porcus* が落ちて、「単独の」の部分だけでイノシシを表すようになった。そのため、のちに、「単数」を表す *singulier* が作られた。

#### oignon(玉ねぎ)と union(結合)

民衆語と学識語のペアである。「単独のまとまり」を表すラテン語 *uninem* から「玉ねぎ」の名前となった。玉ねぎが一個の球根として生えることによる。発音は×「オワニョン」[wapɔ̃]ではなく「オニョン」[ɔ̃ɲɔ̃]である。*union* との類推からかと思うと、そうではない。*oi-*の *-i-* は *gn* の付属品としてかつては常に *gn* の前におかれていた。したがって *oi-gnon* ではなく、本来は *oignon* であり、初めから「オ・ニョン」だった。

#### grimoire(魔術書)と grammaire(文法)

中世のころ、文法家は、字の読めない大衆の間では魔法使いだと思われていた。魔術師や魔法使いの書を表す *grimoire* になぞらえて、文法を意味する学識語 *grammaire* がつくられた。英語では、そこから「魅力」を表す *glamour* が作られた。つまり、「魔術の書」と「魅力ある」グラマーと「文法」のグラマーは同語源である。

### 3.3.7.二重語の例(リスト)

二重語の例(名詞・形容詞と動詞)をまとめておく<sup>32</sup>。

#### 二重語リスト

##### 名詞・形容詞

民衆語	学識語	ラテン語
abricot あんず, アプリコット	précoce 早生(早生), 早熟な	<i>praecox</i>
agrégé 教授資格者	agrégat 集合体, 凝集	<i>agregatus</i>
aigre 酸っぱい	âcre 味のきつい, からい	<i>acris</i>

<sup>30</sup> Grevisse et al., p.156., Bárdosi & al., p.225.

<sup>31</sup> Hamon, 森本などによる。

<sup>32</sup> Bárdosi & al., Berlion, Grevisse et al., Hamon, Martin, 森本, Tomassonne, Walter, 山田などを参考に作成した。ラテン語の語形は、各文献に出てきたものをそのまま採用したため、格は統一されていない。

aimant 磁石	diamant ダイヤモンド	<i>a(d)amantem</i>
amande アーモンド	amygdale 扁桃腺	<i>amygdal</i>
ange 天使	angélus お告げの祈り	<i>angelus</i>
arc 弓, アーチ	arche アーチ	<i>argus</i>
août 8月	auguste 道化師・おごそかな	<i>augustus</i>
aube 夜明け・発端	album アルバム	<i>alba</i>
autre 別の	altération 変化・変質	<i>alter</i> 他方
avenir 将来	advenir 起こる	<i>advenire</i>
avoué 代訴人	avocat 弁護士	<i>advocatus</i>
béton コンクリート	bitume アスファルト	<i>bitumen</i>
boule タマ	bulle 泡	<i>bullā</i>
cancre, chancre イチョウガニ, 劣等生, 害毒	cancer 癌	<i>cancer</i>
chaleur 熱・暑さ	caléfaction (chauffer の名詞)	<i>calor</i>
challenge 挑戦	calomnie 誹謗中傷	<i>calumni</i>
chance 機会・チャンス	cadence リズム, テンポ, 調子, スピード	<i>cadentia</i>
charité 慈悲	caritatif 慈善の	<i>caritatem</i>
chef シェフ	capital 主要な	<i>caput</i> 頭( <i>head</i> )
chétif 虚弱な	captif 捕虜の	<i>captivus</i>
cheville くるぶし	clavicule 鎖骨	<i>claviculam</i>
chose もの	cause, causal 原因(の)	<i>causa</i> 理由・ 守るべきもの
close 閉ざされた	clause 条項	<i>clausa</i>
clown ピエロ	colon 入植者	<i>colonus</i>
cœur 心・心臓	cordial 心からの・心のこもった	<i>cordis</i>
coi (coite) じっと, 黙っている [いずれも古語]	quiet (quiète) 静かな, 穏やかな	<i>quietus</i>
comté 伯爵領・選挙区	comité 委員会	<i>comitatus</i>
confiance 信頼	confidence 内密の話	<i>confidentia</i>
cour 中庭・宮廷・法廷	cohorte 歩兵隊	<i>cohortem</i>
créance 債権, 信用	croyance 信じること, 信仰	<i>credentia</i>
cueillette 摘み取り	collecte 募金, 収集	<i>collecta</i>
délié 解かれた	délicat 細い, 繊細な	<i>delicatum,</i> <i>delicatus</i>
dîme 十分の一税, ピンはね	décime 十分の一税, 付加税	<i>decem</i>
doigt 指	digital 指の・デジタルの	<i>digitus</i> つかむ・指・爪先
droit まっすぐな, 正しい	direct まっすぐな, 直接の	<i>directus</i>
eau 水	aquatique [akwatik] 水生の	<i>aqua</i>
écolier 生徒	scolaire 学校の	<i>scholaris</i>

entier 全体の, 完全な	intègre 潔白な, 公明正大な	<i>integer</i> 手つかず・全体の
envers 裏	inverse 逆・反対(の)	<i>inversus</i>
épice 香辛料・スパイス	espèce 種類	<i>species</i>
essaim ミツバチの群れ, 分封	examen 試験	<i>examen</i> 秤の針
étier 導水路, 小運河, 小河口(古)	estuaire (大)河口	<i>aestuarium</i>
étroit 狭い	strict 厳密な	<i>strictum(-us)</i> 狭い・接近した
évêque 司教	épiscopat 史教職, épiscopal 司教の	<i>episcopum</i>
évier 流し, aiguère 水差し	aquarium 水槽, 水族館	<i>aquarium</i>
façon 方法・態度	faction 見張り, 過激派	<i>factionem</i>
fait 事実	facture 請求書	<i>factum</i> 行為
fantasque 気まぐれな	fantastique 空想上の・幻想的な	<i>phantasticus</i>
fierté 自慢・誇り	férocité 獐猛性	<i>ferox</i>
fièvre 熱	fébrilité 興奮	<i>febris</i>
fléau 災い	flagelle ふらつく(動詞)	<i>flagellum</i>
foire 見本市・フェア	férié 祝祭日	<i>feriae</i>
formé 形作られた・成長した	format 様式	<i>formatus.</i>
foison 多量, 大量	fusion 融解, 溶解	<i>fusionem</i>
forge 鍛冶(かじ)屋・炉	fabrique 製造所, fabriquer, fabrication	<i>fablicam</i>
frêle 弱々しい・はかない	fragile もろい・弱い	<i>fragilem, fragilis</i>
froid 寒い・冷たい	frigide 冷感症・不感症の	<i>frigidus</i> [cf. frigidaire]
grimoire 魔術書	grammaire 文法	<i>grammatika</i>
heur 幸運	augure 前兆, 縁起	<i>augurium</i>
hôtel ホテル	hôpital 病院, hospitalité 歓待	<i>hospitalem</i>
lait ミルク・牛乳	lacté ミルクの, lactation 授乳, lactique 乳の	<i>lactem</i>
loi 法	légal 法律の・合法的な	<i>legem, lex, legis</i>
loyal 誠実な	légal 法律上の	<i>legalis</i>
loisir 暇・レジャー	licence 学士号・ライセンス	<i>licere</i> 自由(にする)・放つ
maire 市長・宰相	major 准尉・少佐, majeur 人差し指	<i>major</i>
mâle (< masle) 雄の	masculin 男性の	<i>masculus</i>
mer 海	marin 海の	<i>mare</i>
métier 職業	ministère 内閣	<i>ministerium</i>
meuble 家具・動産	mobile 動かせる	<i>mobilis</i>
mistral 風(南仏の)	magistral 見事な, 教師然とした	<i>magister</i> 師

moment 瞬間, 時期	mouvement 動き, 変化	<i>movimentum</i>
naïf 素朴な	natif 生まれ(つき)の	<i>nativum</i>
Noël クリスマス・降誕祭	natal 生まれた(ところの)	<i>natalem</i>
noise いさかい	nausée 吐き気, 嫌悪感	<i>nausea</i> 船酔い
nombre 数	numéro 番号	<i>numerus</i>
œil 目・眼	oculaire 目・眼の	<i>oculus</i>
oeuf 卵	ove 卵型装飾	<i>ovum</i>
oignon 玉ねぎ	union 結合	<i>unionem</i>
oreille 耳	auriculaire 耳の	<i>auricula</i>
orteil 足指	article 品物	<i>articulus</i>
papier 紙	papyrus パピルス(植物)・古文書	<i>papyrus</i>
parcelle 小片, 少量, 土地の区画	particule 粒子, 小辞	<i>particula</i>
parole 言葉	parabole たとえ話	<i>parabola</i>
paume 手のひら	palme ヤシの葉	<i>palma</i>
pavillon 旗・一戸建て・別館	papillon 蝶々	<i>papilio(nem)</i> 蝶・蛾・テント
peuple 民衆	populaire 庶民の・人気のある	<i>populus</i>
pitié 憐れみ	piété 信心, 敬虔	<i>pietatem</i>
poison 毒	potion 水薬	<i>potionem</i> 飲物・毒・薬
poitrail (馬などの)胸先	pectoral 胸(筋)(の)	<i>pectus, -toris</i>
porche ポーチ, 玄関口	portique 横木, 梁, 柱廊	<i>porticus</i>
poulpe タコ	polype ポリープ	<i>polypus</i>
prêcheur お説教屋	prédicateur 説教師	<i>praedicatorem</i>
premier 最初の	primaire 初等の	<i>primarium</i>
prison 刑務所	préhension 把握・捕捉	<i>prehensionem</i>
prudence 慎重さ	providence 摂理	<i>providentia,</i> <i>providere</i> 予知する
raide かたい	rigide 厳格な, 厳しい	<i>rigidus</i>
raison 理由・理性・比率	ration 割当て量	<i>rationem</i>
rançon 身代金	rédemption 贖罪, 償い	<i>redemptionem</i>
rentier 年金生活者 →entier 全体の, 完全な(↑)	intègre 潔白な, 公明正大な	<i>integer</i> 手つかず・全体の
ronde 輪舞	rotonde 円形建物	<i>rotonda</i>
royal 王の	régale 王水(eau ~)	<i>regalis</i>
sanglier イノシシ	singulier 奇妙な, 独特の, 単数の	<i>singularis</i>
seiche コウイカ	sépia 墨汁, セビア	<i>sepia</i>
senestre 左の	sinistre 不吉な	<i>sinistra</i>
serment 宣誓, 誓い	sacrement 秘跡, 聖礼典	<i>sacramentum</i>

soupçon 疑い, 憶測 sûr(eté) 確か(さ)	suspicion 疑惑 sécurité 安全・安心	<i>suspicionem</i> <i>securus,</i> <i>securitatem</i> 安全
terroir 農産地, 郷土 timbre 太古の裏皮 tôle 板金 trahison 裏切り, 歪曲 usine 工場 veille 前日, 徹夜 vie 生活・一生 voeu 願い voix 声 voyelle 母音 voyage 旅行 voyer (agent voyer) 道路管理官	territoire 領土 tympan 鼓膜 table テーブル, 食卓 tradition 伝統, 伝承 officine 本拠地, 薬局 vigile 前夜, 前日 vital 生命の vote 投票 vocal 声の vocal 声・歌の viatique 旅費, 布施 vicaire 助任司祭, 代理	<i>territorium</i> <i>tympanum</i> <i>tabula</i> <i>traditio</i> 引渡し <i>officinam</i> <i>vigilia</i> <i>vita</i> <i>votum</i> <i>vox, vocis</i> <i>vocalis</i> <i>viaticum</i> <i>vicarium</i>
動詞		
affaïter (古)飼い慣らす・仕込む	affecter 割り当てる・整える	<i>affectare</i>
apprendre 習う, 知る	appréhender 心配する, 把握する	<i>apprehendere</i>
assener 一撃を加える	assigner 割り当てる, 指定する	<i>assignare</i>
béer 唾然とする, 裂け目が口を開けている	bayer 唾然とする	<i>batare</i> ←擬音語
cailler 凍える, 凝固, 凝結する	coaguler 凝固, 凝結する[させる]	<i>coagulare</i>
combler 埋める	cumuler 兼務する, 累積する	<i>cumulare</i>
conter 語る	compter 数える	<i>computare</i>
※表記上の二重語(Grevisse)		
coucher 横たえる	colloquer 置く, 厄介払いする	<i>collocare</i>
dessiner 描く	désigner 指し示す	<i>designare</i>
dîner 夕食(をとる)	déjeuner 昼食(をとる)	<i>jejunus</i> 断食する
douer 授ける, 恵む	doter 持参金を与える, 支給する	<i>dotare</i>
écouter 聴く	ausculter 聴診・調査する	<i>auscultare</i>
employer 使う	impliquer 巻き添えにする	<i>implicare</i>
faillir 危うくしそうになる←犯す	falloir 必要とする	<i>fallere</i> だます
fuir 逃げる	fugitif 逃亡した・はかない	<i>fugere, fugire</i>
geindre うめく, こぼす	gémir うめく, 嘆く, 風がうなる	<i>gemere</i>
livrer 引渡し	libérer 自由にする	<i>liberare</i>
mâcher 噛む, 反芻する	mastiquer 咀嚼する	<i>masticare</i>

nager 泳ぐ	naviguer 航海する	<i>navigare</i>
ouvrer (oeuvrer) 開ける, 働く	opérer 実行する, 作用する, 手術する	<i>operari</i> 従事する <i>opus</i> 仕事, 作品
peser 重さをはかる	penser 考える	<i>pensare</i>
rayer 線を引いて消す	radier 削除・抹消する	<i>ratis</i>
recouvrer 取り戻す	recupérer 回収する	<i>recuperare</i>
relâcher ゆるめる	relaxer くつろがせる	<i>relaxare</i>
ruser 策を弄する	refuser (ou récuser) 異議を申し立てる	<i>recusare</i>
sevrer 離乳させる, 奪う	séparer 分ける	<i>separare</i>
soucier (se) 気にかける	solliciter 願い出る, 懇願する	<i>sollicitare</i>
souder 溶接する, 接合する	solder 俸給を支払う, 雇う, 特売する	<i>solvere</i>
souvenir (se) 思い出す	subvenir 供する, 援助する	<i>subvenire</i>
tâcher 努める	taxer 課税する	<i>taxare</i>
toucher 触る	toquer 軽くたたく	<i>toccare</i> , 擬音語 <i>tokk-</i>
tremper 浸す	tempérer (寒暖を) 和らげる	<i>temperare</i>

### 3.4.フランス語における学識語の特殊性

民衆語と学識語という区別は、多くの言語において多かれ少なかれ見られる現象である。

たとえば日本語においては、和語（大和言葉）と漢語という形で現れる。和語が民衆語であり、漢語が学識語である。「時（とき）」に対して「時間」、「雨降り」に対して「降雨」というように、前者は日常語であり、後者は公のあらたまった場面や専門的な話などで用いられる傾向がある。また、前者は古くから用いられてきたのに対し、後者はしばしば成立の時期が比較的新しい。さらに、後者の漢語は基本的に中国語からの借用語と考えられる<sup>33</sup>。

それに対して、フランス語についてはどうだろうか。

使用域の違いについては、日本語における関係とよく似ている。

形式については、継承的な語（民衆語）はあまりにすり減ったため見違えるほどになってしまったが、後から借用された学識語はラテン語によく似ている。一般に、語末だけがフランス語化しているが<sup>34</sup>、全体として固い音の印象をもつ。この形式的な対比関係も日本語と似ている。

しかしながら決定的な違いがある。それは、ラテン語はフランス語から見れば、親にあたる言

<sup>33</sup> もちろん、日本で作られた漢語も少なくないが、その場合は漢語のまねをして作られたと言えないこともない。

<sup>34</sup> Les mots héréditaires sont si usés qu'ils sont devenus méconnaissables, les mots empruntés ressemblent beaucoup au latin. En général, seule leur fin est francisée. (Tomassonne, 2001, p.132)

語(*langue mère*<sup>35</sup>)だということである。全く異なる言語から借用してきた語が借用語ということなら、親言語から語彙を再生・復活させるのは、一般的な借用とは異なる。

このようなやり方は、日本語のような親言語(祖語)の不明な言語ではもちろん、ゲルマン語を親言語とする英語でもほとんど見られないと思われる。そういう言語では、一般に外国語から学識語を得るのが普通である。日本語では主に中国語からの借用語(漢語)であり、英語では、ラテン語やフランス語からの借用語が学識語として使われている。この点において、フランス語の(特にラテン語系の)学識語は一般的な意味での借用とは異なるものであると言わざるを得ない。これはフランス語の語彙の特殊な事情によるものだと言えよう<sup>36</sup>。

#### 4. まとめ

本論では、フランス語の語彙を、歴史的に影響の大きかった 3 つの言語、すなわちケルト語[ガリア語]、ゲルマン語、ラテン語由来のものについて考察した。

そこには、それぞれの言語文化が多かれ少なかれ反映されている。しかしながら、前 2 者の残した語はそれほど多くない。最も多いのはラテン系語彙だが、ラテン系語彙の特徴はその多さだけではない。そこにはフランス語の特殊な事情があった。すなわち、それらの語彙は必ずしもすべてが一元的に形成されたものではなく、異なる形成時期が原因となって、民衆語と学識語という、異なる形式特徴と使用レベルをもつ同語源語ペア、二重語という構造が生じていた。我々はここにフランス語の語彙の持つ特殊性を見た。

#### 【文献】

- Bárdosi V. & M. Pálffy. *Précis de lexicologie française I.* (Budapest : Tankönyvkiadó, 1983)
- Berlion, D. *Connaissez-vous bien la langue française ?* (Paris : Larousse, 2011)
- Dauzat, A. *Le Génie de la langue française.* (Paris : Payot, 1942)
- ＝ドーザ(杉富士雄他訳)『フランス語の特質』(大修館書店, 1982)
- Dauzat, A. et al. *Nouveau Dictionnaire étymologique et historique.* (Paris : Larousse, 1971)
- Dubois, J. et al. *Dictionnaire de linguistique.* (Paris : Larousse, 1973)
- Grevisse, M. et A. Goosse. *Le bon usage : grammaire française.* (15e éd.) (Bruxelles : De Boeck, 2011)

---

<sup>35</sup> 親言語*langue(-)mère*(「祖語」という訳もある)とは「語族による言語の分類において、ある言語が正規の系統によってそこから出てきたとされる言語のことを言う:ラテン語はフランス語の親言語である。」(マルローゾー). « Dans la classification des langues par familles, on appelle ainsi celle d'où est issue selon une descendance normale telle langue observée : le latin est la langue mère du français » (Marouzeau, 1951, *Lexique de terminologie ling.* p.143).

<sup>36</sup> 同じラテン語から派生したスペイン語やイタリア語などいわゆるロマン諸語では、同様に親言語ラテン語からの借用によって学識語が生じる可能性があろう。ただ、フランス語のように形式上の差が明確ではなく、一般に意識されにくいと思われる。

- Guiraud, P. *Les mots savants*. (QSJ,1325). (Paris : PUF, 1968,1978)
- Hamon, A. *Les mots du français*. (Paris : Hachette, 1992)
- Marouzeau, J. *Lexique de la terminologie linguistique*. (3<sup>e</sup> éd.) (Paris : Geuthner, 1951.)
- Martin, R. *Comprendre la linguistique*. (Paris : PUF, 2002.)
- Mitterand, H. *Les mots français*. (Paris : P.U.F., 1963, 2000 (10<sup>e</sup> éd.)).  
=ミッテラン『フランス語の語彙』(白水社, 1984)
- Tomassonne, R. (dir.) *Grands repères culturels pour une langue : le français*.  
(Paris : Hachette, 2001)
- Walter, H. *Honni soit qui mal y pense*. (Paris : Laffont, 2001)
- 石野好一『フランス語を知る、ことばを考える』(朝日出版社, 2007 年)
- 「フランス語を知る、ことばを考える(公開講座「ことばの世界・世界のことば)」」『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報) 第 2 号, 2010 年 3 月, pp.117-132.
- 「フランス語を知る、ことばを考える —語彙の諸相—」『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報) 第 6 号, 2014 年 3 月, pp. 41-69.
- 佐久間治『英語の不思議再発見』(筑摩書房, 1996)
- 田辺保 『フランス語のこころ』(至誠堂, 1969 年)(→新版 1997 年)
- 『フランス語はどんな言葉か』(講談社, 1997 年)
- 髭郁彦, 川島浩一郎, 渡邊淳也『フランス語学概説』(三恵社, 2008)  
→『フランス語学概論』(駿河台出版社, 2010)
- 堀井令以知『言語文化の深層をたずねて』(ミネルヴァ書房, 2013)
- 前島儀一郎『英仏比較文法』(大学書林, 1961, 1986)
- 森本英夫『フランス語の社会学』(駿河台出版社, 1988)
- 山田秀男『フランス語史』(駿河台出版社, 1981)
- リカード『フランス語史を学ぶ人のために』(伊藤忠夫・高橋秀雄訳) (世界思想社, 1995)
- (フランス語辞典)
- Le Grand Robert : dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*.  
(Paris : Le Robert, 2005)
- 『クラウン仏和辞典』(三省堂, 2005)
- 『小学館ロベール仏和大辞典』(小学館, 1989)
- 『プチ・ロワイヤル仏和・和仏辞典』(旺文社, 2003)
- 『ロワイヤル仏和中辞典』(旺文社, 2005)